

これは報われない恋だ。

2

CHARACTERS



クラッシュ

マック行きつけの雑貨屋の店主。
ハーフエルフの美人さん。
ちゃきちゃきの商売人で、
古代魔道語に長けている。



ヴィル

ヴィデロさんによく似ている男性。
健吾と偶然出会った。

高橋 (高橋雄太)

大剣と鎧に愛と情熱、そして金をかけるプレイヤー。
『高橋と愉快な仲間たち』というパーティーを組んでいる。
——リアルでは、健吾の腐れ縁の親友。

ADO (アナザーディメンションオンライン)

圧倒的な没入感と世界観を誇る、VRMMORPG。
十年前に勇者が魔王を倒し、平和になった世界を舞台に
プレイヤーたちは職業を決めてゲームをプレイすることになる。
多人数でパーティーを組むことも可能。
バトル、生産など自分のやりたいことをやることができ、
ゲーム内のNPCとも多彩な交流ができるのが特徴。

This is Un requited

——でも、少なくとも、俺が好きになつたのは、
バーガーを奢ってくれたヴィルさんではなくて、
『幸運』のヴィデロさんでもなくして、
この、日の前にいるヴィデロさんだ。

マック (郷野健吾)

お人好しな鍊金術師にして、薬師。
健吾として楽しい生活を送っている中、
ヴィデロさんに激似な人を
リアルで発見して——!?

「俺を、ただ俺としてだけ見ててくれる
居心地の良さは甘露のようで……
マックとただ話すだけで、幸せだったんだ」

ヴィデロ

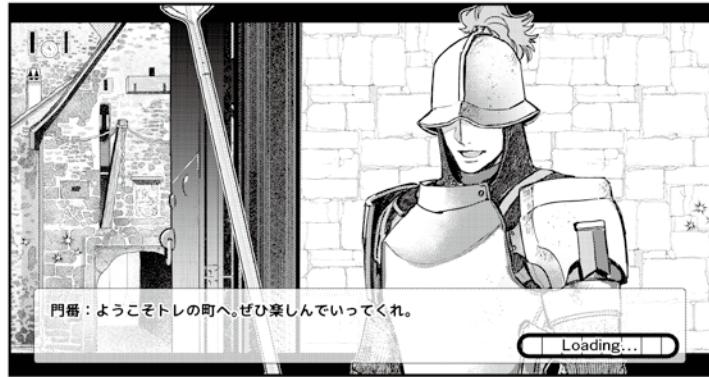
トレの街の門番だったが、
現在出張中。
マックのことを心から愛している。
『幸運』と呼ばれていることがあるようだが……

目 次

これは報われない恋だ。 2

番外編 露店の掘り出し物

これは報われない恋だ。
2



プロローグ

『アナザーディメンションオンライン』、通称ADO。

今、VRゲームの中で、特に人気の高い作品だ。

俺、郷野健吾も薬師のマックとして、がつたり楽しんでる。

とはいって、俺は剣で魔物を倒して楽しむんじゃなくて、プラスコや乳鉢などの調薬器具を使った薬師や、鍊金釜を使う鍊金術師としてプレイしている。

いわゆる、生産組というやつだ。

腕の立つプレイヤーとパーティーを組んでいるわけでもなく、一人黙々と生産しているので、基

本はソロで活動している。

レベルはそこそこでも魔物を倒す火力がないので、俺は三番目の街、トレで工房を買って、拠点にした。

そして、最近このADOの中で、恋人が出来た。

その恋人は、キラキラの金髪に森を思わせるような深い緑色の瞳、そして整った顔に素晴らしい筋肉を持った、最高に格好いい門番さん。

ADOのゲーム内にいる、いわゆるノンプレイヤーキャラクター、NPCと言われる人だ。
名前はヴィデロさん。

俺がドラゴンに襲われた時に、彼は、その身を挺して俺を助けてくれた。……でも、その時に致命傷に近い傷を負ってしまった、ポーションを飲む力すら失われつつあった。そんなヴィデロさんを助けるために俺が取った方法は、□移し——

復活したヴィデロさんは、俺の服がボロボロだったことを気にして、門番さんの詰所つめ所にあるヴィデロさんの部屋につれてきてくれた。

そこで俺を抱き締めて、ヴィデロさんは真剣な顔で言つたんだ。

「ほんとは、ほんとはな……」

ヴィデロさんがそつと呟く。

「さつき、本当だつたら少しくらいなら腕を動かせたんだ。だから、離そうと思えば、マックを離すくらいは出来たんだ。出血で身体が思うように動かなかつたつてのは本当なんだけど」

じやあどうして、と聞いた俺にヴィデロさんは続けた。

「——もうだめだ、と思ったとき、マックが腕の中にいるならきつと最高の死だ、なんて思つてしまつたんだ。だから、腕を離せなかつた……」

その言葉に、胸がぎゅっと締め付けられた。
告白されたのなんて人生初めてだつたんだ。しかも、こんな格好いい人に。

俺も、ヴィデロさんがもうトレの門に立たなくなると思つたら、気が気じやなかつた。

なりふりかまわず口移しでポーションを飲ませるくらいには。

そんな思いで、俺は、今度こそ人命救助じゃないキスを、受け入れた。

そして、いざ……という時に、俺のパンツが剥がれないことに気が付いた。

俺、まだ成人設定してなかつたんだよ！ すつごくいい雰囲気だつたのに……！

そんなこんなで付き合い始めたヴィデロさんは、休みの日に俺とデートをしてくれるようになつた。

そんな折、友達のハーフエルフでトレ雑貨屋の店主でもあるクラッシュから、一つの依頼が舞い込んだ。

どうやら六番目の街セツテで薬草が育たず、ポーション類が不足しているらしい。

クラッシュはその補填をすべく、トレの街からセツテに向かうことになつたんだけど、護衛してくれる人がいなかつたんだそうだ。そんなわけで、俺に護衛依頼がやつってきた。

ちょうど親友の雄太に『破格の値段の護衛には絶対に盗賊が出る』的なアドバイスを貰つていた俺は、できる限りの用意をして、その足でクラッシュと共にトレを発つた。

途中までは順調だつたその旅では雄太がフラグを立てたのか、しつかりと盗賊が襲つてきた。

俺とクラッシュはギルドから借りた馬車から落とされ、魔物の跋扈する森の中を逃げないとけなくなつてしまつた。

二人で必死に森の中を逃げ回り、冒険者に扮した暗殺者をなんとか倒したところで、絶対に近付

くなよと言われていた、トッププレイヤーでも死に戻り必至の大型魔物と鉢合わせてしまう。

俺はいいけどクラッシュだけは逃げてほしい……！ と必死になつっていたところで、雄太率いるパーティの『高橋と愉快な仲間たち』と話題沸騰中のダンジョン探索者のセイジさんが助けに来てくれた。

流れでシークレットダンジョンを踏破して、安全なセツテの冒険者ギルドに転移魔法陣で連れてきてもらい、なんとかかんとかクエストクリアして――

けれど、そこでいざこざが起きて、ヴィデロさんからプレゼントしてもらった青い羽根のアクセサリーが壊れちゃつたんだ。

「大丈夫、そういうのは作つた場所に持つていけば直してもらえるんだから」

宿屋のおかみさんに元気づけられ、帰りにこれを買った店に寄ろうと気合いを入れたところで、さすがにクエストが発生。その薬師クエストをクリアして農園を復活させ、ようやくトレ――ヴィデロさんの元に帰れることになつたんだけど。砂漠都市で、俺達を乗せて馬車を牽いてくれていたクイックホースを預かるクエストまで発生してしまつた。

そんな俺は一路トレ……の前にクワットロのお店に寄ることにした。

そこではイケメン執事風店主さんが快く、壊れたアクセサリーを直してくれたんだけど。

「もう少しだけ、お待ち下さい。お客様の求めていたものが、手に入りますので」

そしてイケメン執事さんにこの世界でのチエスを教えてもらつていてるうちに、来客があつた。

「来たようですね。お待ち下さい」

イケメン執事さんが店に迎え入れたのは——

「マック、迎えに来た」

「ヴィデロさん……！」

確かに、俺が一番会いたかった人に、会えた。イケメン執事さんが言っていたのは、このことだつたのかな。

ようやく会えた喜びを味わつていると、イケメン執事さんが、とてもいい笑顔で、意味深な言葉を口にした。

——運命は素晴らしい方向に動き始めました。お二人の未来に祝福を——

一、トレに戻ってきた

俺達は、イケメン執事さんの言葉に首を捻りながら店を後にした。

運命なんて、大げさな言葉だと思わなくもないけれど、あの人があうと、それが真実だという気がしてくる。

——もしヴィデロさんがここまで来てくれなかつたら、俺達は近い未来別れていたつてこと?

俺は隣に立つヴィデロさんを見上げた。

別れたくない。でも実際にはヴィデロさんとはこのA D O（ゲーム）の中でしか会えないわけで。

イケメン執事さんの言葉を反芻すると、だんだん意味がわからなくなつていく。どこまで行つても、どう頑張つても、ヴィデロさんとの未来は分かたれるしかないモノだから。

じわつと湧き上がつた寂しさを振り払うように、そつとヴィデロさんの腕をつかんだ。

「どうしたんだ? トレに帰ろう、マック」

「うん」

返事をしたところで、暗がりからクイックホースが出てきた。

隣に、普通の馬もいる。二頭並んでると馬の親子拡大版つて感じがして、可愛い。

「ヴィデロさん馬に乗ってきたんだ」

「ああ、馬車はもう出でていないし、こっちの方が早いからな。通信魔道具で連絡が来ること自体がすでに大事だから、詰所の馬を快く貸してもらえたんだ」

「そうだつたんだ。可愛いなあ。あ、メイレの実、食べる?」

馬の目つていつ見ても優しそうだよね、とさつきの寂しさも忘れてインベントリを弄り始める。ヴィデロさんが苦笑したのが耳に入つた。

「さつきレガロさんに言われたばかりだろ。その実は特別な実だつて。それなのにそんな簡単にあげていいのか?」

「でも俺、他にあげられそうなもの持つてないんだ。パンは馬の身体によくないかもだし」

トレからずつと走り通しだったなんてさ、絶対お腹減つてゐるだろうし喉も渴いただろうから。メイレの実を二つ取り出して、クイックホースとヴィデロさんの馬の前に差し出すと、馬は嬉しそうに食べ始めた。

でもクイックホースは俺の手を鼻でグイッと押して、馬の目の前まで持つていつた。

手が空くと、俺はクイックホースの胸を撫でた。

でも、どうやつて帰ろう。クイックホースで帰ると、普通の馬のヴィデロさんを置いていつちゃうんじゃないかな。

それより何より、俺はクイックホースの背中に自力で乗れない。大問題だ。店に戻つてイケメン執事さんに脚立でも借りようかな。

そんなことを思つていたら、ヴィデロさんがクイックホースの鼻を撫でて「俺も乗せてくれないか？」と頼み出した。

クイックホースはちらりとヴィデロさんと俺を見て、グイッと自分の身体をヴィデロさんに寄せた。いいつてことか。ほんといい子。

ヴィデロさんは鞍に手を掛けると、とんとんひよいつと背中に乗つてしまつた。

す、すごい。ヴィデロさん、かつこいい。好き。

そして、クイックホースの背の上から、俺に向かつて手を差し出した。

ギリギリ届くくらいのヴィデロさんの手に掴まつた瞬間、俺の身体もひよいつと引っ張り上げら

れ、いつの間にやら鞍の上、ヴィデロさんの前にすっぽりと収まつていて。

ふああああ！ 今の持ち上げ方かっこいい！ 好き！

「この街の門にこの馬を預けていくから」

馬の手綱を握ると、ヴィデロさんは俺の耳元でそう教えてくれた。

「よ、よかつた」

ヴィデロさんの声が近い。カッと頬を熱くしながら、なんとかそれだけ返す。

そうだよね、俺、今ヴィデロさんの前にすっぽり収まつてから近くて当たり前だよね。背中が

ヴィデロさんに密着していく、心臓が煩い。

このドキドキがバレてないといいんだけど。

街中はゆつくりと歩き、門の所でクワットロの門番さんにヴィデロさんが乗つてきた馬を預ける。クイックホースは門を抜けた瞬間、徐々にスピードを上げ始めた。

夜の景色がまるで新幹線に乗つてゐるみたいに後ろへ流れていく。

俺一人で乗つていた時より確実に速いのは、ヴィデロさんの腕がしつかりと俺の身体を支えていて乗り手が安定しているからだと直感した。そうだよね。俺一人では不安だよね。スピード出すには。ハハハ……。

でも実際、一人で乗つている時よりも格段に安定度は増してゐる。ヴィデロさんの頼れる胸板と力強く俺を支える腕に最高に安心できた。

……ちらつと後ろを向くと、その都度微笑んでくれるその顔が好き。

「マック、疲れないか？」

「全然、大丈夫。ヴィデロさんが支えててくれるから、すごく快適」

「そうか。この調子だと、すぐにトレの街に着いちゃうな。夜中の騎乗デート、もつと楽しんでもいいくらいなのに残念だ」

「うん。ほんとに」

夜中の騎乗デートなんていうドキドキワードをさりげなく呟くヴィデロさんが好きだな。

俺ももつと楽しみたい。けれど、俺、トレの冒険者ギルドにこのクイックホースを届けるクエストの途中だつたんだよ。

でも、着くまでは楽しんでもいいかな。なんて思ついたら。

「まあでも、マックが腕の中にいるだけで最高の気分だな」

耳元で囁かれて、ついでに耳にチュッとキスされた。ちょ、ヴィデロさん、走るクイックホースの上で誘惑しないで！

ぞくぞくしてドキドキしてヤバいから！ 俺、お年頃なんだから！

トレの冒険者ギルドに着いて、クイックホースの背中から降りる頃には、俺は満身創痍だつた。ヴィデロさんがずっと耳元で囁くんだもん。今度はこういう体位もいいなとか。でも顔が見えないのは残念だとか。

俺がワタワタしてたのが楽しかったみたい。ぶ、無事着いてよかつた。そして俺、パンツ剥がれ

ない状態でよかつた。そうじやなかつたらきつと下半身が大変なことになつてたよ……
「ここまで俺を連れてきてくれてありがとね」

クイックホースの鼻を撫でながら、俺はクイックホースとお別れした。

ギルド前に着いたクイックホースは、すごく凛としていて、自分の使命を全うしたつていう誇りがにじみ出でていてかつこよかつた。

ギルドでクイックホースを連れてきたことを報告すると、ギルド職員さんが「少々お待ち下さい」と席を立つて奥にある階段を上つていつてしまふ。

すぐに戻ってきた職員さんの後ろには、クラッショウそつくりの超美人な女人がいた。

耳はクラッショウと同じように尖つていて、若々しい。スタイル抜群でとても快活そうな雰囲気だ。彼女は俺をじつと見つめてから頷いた。

「あなたが、マックね」

「はい。ええと、もしかして、クラッショウのお姉さんですか？ あれ、でもクラッショウって一人つ子だつたんじや……」

——お母さんが旅に出ている間、お父さんと一人でいたとか言つていたよ。んん？ 考えていると、横からヴィデロさんがそつと教えてくれた。

「彼女が、ギルドの統括で、クラッショウの母親だ」

「え」

だつて。見た目完璧クラッショウと同年代なんだけど。お、お母さん……？

混乱している俺があんまりにも可笑しかったのか、目の前の超美人は口を押さえて笑い始めた。
「やだお姉さんだなんて。ふふ、なんていい子なの。さすがクラッシュのお友達ね。気に入ったわ、
マック」

「あ、りがとうござります……？」

俺のお礼に、クラッシュのお母さんはさらに笑みを深めた。

でもなんで、ここにギルドの一番偉い人が出でくるんだろう。

「クイックホースを届けてくれた報酬と、クラッシュを助けてくれた報酬の話をしたいのだけど」「クラッシュの方はもうセッテのギルドで報酬を受け取りましたよ？」

すると、クラッシュのお母さんはハツとした顔をした。

「ごめんなさい、報酬なんて言つちやだめね。クラッシュと仲良くしてくれている子にお礼をした
いだけなの。まずはクイックホースを連れてきてくれた報酬なんだけれど……何も考えてなかつた
のよね。こんなにすぐ戻つてくると思わなかつたし。かといって今の情勢でクラッシュを砂漠都市
まで向かわせたくないなかつたし」

その言葉に、一瞬自分の顔が強張るのを感じた。

「……情勢つて。もしかして、今回の襲撃と関係あるつてことですか？」

「まあ、ねえ……」

クラッシュのお母さんが視線を床に向ける。俺はこつそりこぶしを握り締めた。

——やっぱりあの襲撃はクラッシュ本人を狙つたものだつたんだ。

雄太の言つていた「高い報酬の護衛クエストは襲撃がある」つていう言葉で納得しちやつていた
けれど、やつぱりそれだけじゃない。クラッシュが依頼を受けてあの道を通ることを知つていた誰
かが襲撃を最初から準備していたつてことだ。

プレイヤーである俺達にとつては特殊クエストの一つだけだけど、それで終わらせていいのかな。
どこかで情報が洩れていた、とかだったら、クエストクリア！ の一言では終わらないよね。

「あ、の、お願いがあるんですけど

単なる疑問でしかないけど。もしかしたらもうクラッシュのお母さんは気付いているのかもしれ
ないけれど。余計なお世話かもしれないけど。

「今度、二人だけで話をさせてもらつてもいいですか？」

十五年前の英雄であり、ギルドの創始者に向かつてこんなことを言うのはどうかと思う。

でもどうせなら少しでもクラッシュが安心していられるように、今の俺の推測や、護衛の時に感
じたことを伝えたい。あの場にいたのはクラッシュと俺だけだつたんだから。

俺の言葉に、クラッシュのお母さんは破顔した。

「やだ、デートのお誘い？ いいわよ、いつにする？ 私はいつでもいいわよ」

冗談めかして了承してくれるクラッシュのお母さん。

よかつた、とホツとした瞬間、手をきゅつと握られた。

横を向くと、真顔でヴィデロさんがこつちを見ている。

え、なんか雰囲気が怖い。

「……マック、明日は非番だから」

ぱそつと呟かれて、じゃあ明日はダメだな、と考える。

「明後日の夕方はどうですか？」

「空けとくわ。でもね、門番くん。私にはライアスという最愛の夫がいるから、そんな顔しなくても大丈夫よ。ふふ。マック、頑張つて」

「え？」

何を頑張るんだ？

そう首を傾げると、ヴィデロさんはちょっとだけ気まずそうな表情をした。クラッシュのお母さんはまたふふふと笑って、俺の注意を引くように手を軽く叩く。

「報酬は、話し合いの時に用意しておくわ。すぐ出せればいいんだけど、ごめんなさいね」「いえ、こつちもクイックホースに連れて帰つてもらつた形になつたので、助かりました」

「まだクエストクリアのマークが出てこないのは、多分報酬がまだだからなんだろう。クエストボードの画面を横目で確認しながら、ヴィデロさんと並んでギルドを出た。

すでに深夜になつている。

ヴィデロさんは詰所に戻るんじやなくて、工房に向かつている。

明日が休みつて言つてたから、泊まつてくれるのかな。

「泊まつ……」

「今日は泊まつてもいいか……？」

「もちろん……！」

泊まつてほしいと言おうとした俺の声に、ヴィデロさんの声が重なる。

ヴィデロさんも離れがたいと思つてくれていたのかなと、ちょっと嬉しくなる。

ヴィデロさんは、時折周りを確認しながら、俺と繋がれた手をしつかりと握つて無言で歩いていた。

しばらくぶりの工房わがやに入ると、途端に安心感が込み上がつた。

ずっと緊張の連続だつたからだろう。雄太達はずつとああいう行動をしているんだ。やつぱり俺には生産職が合つているよ……！

ヴィデロさんを招き入れるために振り返つた瞬間、力強い腕に抱きこまれて、上を向かされ、キスされた。

「ん……あんん」

貪るようなキスに、少しだけ驚く。

けれど、久しぶりの深いキスに、胸が熱くなつていく。

ヴィデロさんの首に腕を回して、自分からも舌を絡める。

この感覺も、久しぶり過ぎて、なんか泣きそう。

気持ちいい。嬉しい。

唇が離れると、ヴィデロさんが俺の顔を覗き込んだ。顔が近い。

「マックは……統括に、惚れたのか……？」

「え？」

そして開かれた口から飛び出してきた言葉に、目が点になつた気がした。
どうしてそうなるんだろう。

首を傾げてヴィデロさんを見ると、ヴィデロさんはあくまで真顔だった。

「一人きりで会うつてどういうことだ？」

え……と考えて、あつ！ と気付く。

あの言葉に、ヴィデロさんは焼きもちを妬いていたのか！ 違うのに！

「そ、それは、あの、そうじゃなくて、クラッシュが」

「クラッシュと二人で出かけてる間に、クラッシュとも何かあつたのか？」

「違うつて！」

ヤバいどうしよう、ヴィデロさんが嫉妬している！ クラッシュとクラッシュのお母さんに！

違うのに！

でも焦つてはいるものの、嫉妬されたことがちょっとだけ嬉しい。

「違うの。人前で話せない話をしたかったんだよ。一人で出た依頼の時の話」

「そうか、クラッシュと一線を越えてしまつたから、そのことで統括に挨拶に行くのか……マック、俺との将来の約束は、忘れたのか……？」

「ちよ、ヴィデロさん！ 違うよ！ 俺はヴィデロさん一筋だよ！ 誤解しないで！ 俺が好きな

のはヴィデロさんだけだつてば!! 大好き！」

そう叫んだ瞬間、ヴィデロさんの口元がニッとした。

え、もしかして、揶揄からかされていた……？

ああ、クラッシュのお母さんが頑張つてつて言つたの、もしかしてこういうこと……？ ヴィデロさんの焼きもち、気付いていたんだ……

「知つてる。でも」

「知つてたんなら……！」

「でも、嫉妬はするし、焦りもする。だつてあの二人はすごく綺麗だから」

「ヴィデロさん……」

一瞬だけ揶揄からかされたことに憤つたけれど、その次のヴィデロさんの言葉で、瞬時に怒りは消え去つた。

「そうだよね。ヴィデロさんの前で別の人と二人つきりで会う約束をした俺が悪かつた。

俺がヴィデロさんにそれをされたら、やつぱり嫌だもん。

俺は少しだけヴィデロさんと身体を離して、彼の胸板に体重を預けた。

「ごめんなさい。……でも、あそこでは話題にできないことを伝えないとけなくて」

「ああ。道中、気付いたことがあつたんだろ？」

「うん。でも、ごめんなさい。俺が無神経だつた」

「いい。マックのことでは、俺の自制が利かなくなるんだ。『運命』と言われて駆け出してしま

くらいには

「ヴィデロさん……」

自嘲するその顔をいつもの顔に戻したくて、俺はヴィデロさんの頬を手のひらで挟んだ。

背伸びをして、ちゅ、と唇をくっつける。屈んでもらわないとディープキスも出来ないこの身長差、ほんとにジヤスト恋人身長差なのかな。もつと大きくなりたい。

「もう遅いから明日に響くのはわかっているけど……マックを抱きたい」

「俺も……ヴィデロさんを感じたい」

あえて時間には目を瞑り、俺は、倉庫から『細胞活性剤 小』を取り出した。

久しぶりのヴィデロさんの腕の中は、想像以上に熱くて、そして幸せだった。
お互いの肌をくっつけて、身体の一番奥でヴィデロさんの熱を感じて。

すっぽりと包まるよう抱きこまれて、胸いっぱいに広がった幸せが、目元からこぼれた。
そのこぼれた幸せを、ヴィデロさんの唇が吸い取っていく。

「マック」

「大好き……つ」

ゆつくりと動くヴィデロさんの動きに合わせて、快感が次々湧き上がっていく。
「ふ……つ、あ、ンん……好き、ヴィデロさ……ん」

「マック……愛してる」

俺も。

言葉にしようと口を開くと、嬌声が漏れる。

すゞく会いたかったんだ。クラッシュと馬車に乗っているときも、森で必死に逃げているときも。隣にヴィデロさんがいたら、つて、ずっと考えていた。

でも、隣に本当にヴィデロさんがいたら全部任せっきりにしちゃって、きっとダメな俺になつていたと思うから、やつぱりいなくてよかつた。

内臓を抉られた俺を見られなくてよかつた。弱い俺を見られなくてよかつた。

無事な姿で目の前に立ててよかつた。

ヴィデロさんの背中を手のひらで堪能しながら、そう安堵した。

ヴィデロさんは俺の傷を手のひらで撫でて、新しい傷がないか確認しつつ、その都度俺が締め付けるのを堪能しているみたいだつた。

俺の搔つ切られた腹は、しつかりと元の古傷のみの肌に戻つていて。

「切られたのは、ここか……？」

「……つ！ あ、うん……つ」

腹が半分になつて、卒倒しそうだつたつて、クラッシュが言つてた

「や……つ、指で、たどらな……つで、んん、そこまでは、酷くな……つあん」

自分では確認できなかつただけなんじやないのか……？」

手で傷をたどりながら、ヴィデロさんが奥を突く。

目の前が白くなつて、下腹部の熱が飛び出す。

でも、まだ奥にはヴィデロさんの熱があつて――

「あ、ああ、あ！　あ……つ、や、待つて、ダメ、は、あ！」

かああつと頭が熱くなつて、ヴィデロさんの背中に回した手に力がこもる。

次から次へと溢れるよう湧き上がる辛いほどの快感に、身体が小刻みに震える。

「……つ、締め過ぎ、だ」

それに合わせて、ヴィデロさんのゆつくりだつた動きも速くなつて、ゲン、と最奥に突き刺さる。熱が身体の奥にじわつと広がつた瞬間、俺の熱も一緒になつて放出された。

ぐつたりとした身体で、奥から抜けていくヴィデロさんの熱を名残惜しく締める。

「ヴィデロさん……好き」

「マック、愛してる」

軽いキスを繰り返して、ヴィデロさんの腕を頭の下に感じながら、俺は目を閉じた。



ふと目を開けて、アレ、と思う。
いつもの、俺の部屋だった。

あの後、ログアウトしたんだつけ。いや、そんな記憶はない。だから、寝落ちかも。
それよりも、ヴィデロさんを隣に寝かせたままログアウトしちゃつたのかな。

寝ぼけ眼で、目覚まし時計を探る。

今何時かな、と時計を見て、一瞬にして目が醒めた。

「八時三十分……！」

完全に遅刻だ。ゲームをやつしていく寝不足で授業を受けられなかつたなんてことになつたら、ヘッドギアを両親に隠されかねない。

慌てて起き上がり、用意をする。

バタバタと下に行くと、すでに一人とも仕事に出ていたようでは無人だつた。

ホツとしつつもご飯を食べている時間はなくて、髪も手入れしないでそのまま家を飛び出した。途中、ぐううと腹が鳴る。

ううう、腹減つた。

俺、朝からがつり食えるから、朝食を抜くのはつらい。

でも、せつかく久しぶりにヴィデロさんと再会できたのに、顔を見ただけでログアウトなんて出るわけないじやん。

……寝坊しても、愛し合いたかったんだ。

慌てていた足を止め、そつと腹を手のひらで押さえる。

本当にこの中にヴィデロさんと愛し合つた証拠が残つてればいいのに。

なんて、バカなことを思つてしまふ。

すでに遅刻確定だし。と腹から手を離して、俺は顔を上げた。
ちょうど隣にはファストフード店があつた。

コーヒーが本格的という調あつい文句のそこは、朝の通勤ラッシュ後の時間帯だけあつて、結構空い
ている。

「なんか食べてこ」

腹が減つてはなんとやらだ。

カランカランとドアベルが鳴るドアを開けて店内に入つていく。
カウンターで注文して、イートインスペースにトレイを持って進む。

寝不足でぼんやりする頭に渴を入れながらテーブルに向かつていると、カツン、と何かに躊つまいた。

「うわ！」

身体がつんのめつて、転ぶ！ と思わず目を瞑る。

次の瞬間、胸を抱きこまれるように身体を支えられた。

「ごめん、大丈夫か？」

すぐ間近から聞こえた声に、目を開ける。

案の定トレイの上で飲み物と食べ物はすごいことになつていていたけれど、そんなことはどうでもよ
かつた。

——この声。

どこかで。

見えてきたのは、高そうなスーツと——

「……ヴィデロさん……？」

思わずそう呟いてしまうほど、ヴィデロさんによく似た顔の外国人さんがいた。

二、びっくりは突然に

ヴィデロさんそつくりの外国人さんは腕一本で俺を支えたまま、大惨事になつた俺のトレイの上
を見て眉尻を下げた。

「大丈夫か？ 悪かつたな。俺の足に引っ掛けてしまつたみたいだ」

「い、いえ」

困つたような顔に、ハツとする。

こんなところにヴィデロさんがいるわけないじやん。

よく見ると髪の色が違う。顔のパーツも少しづつ違う。

……違う、よね？

二度見するくらいには、ヴィデロさんにそつくりだつた。

ああでも、腕の筋肉はヴィデロさんの方があるけれど……

俺は慌てて体勢を立て直した。

そこでようやく腕が離れ、なんとなく、腕が離れたことにほつとした。

「ああ、これはもう食べられないな。同じものをお詫びに奢る」

「……いえ、俺の不注意だったので、気にしないで下さい」

「そう言つて断ると、ヴィデロさんのそつくりさんは少しだけ目を瞠みはつた。

そして、スッと目を細めた。

「そつはいかない。これは見たところ朝食だろ。朝を抜いたら午前中使い物にならない」

「でも」

「デモはいらない。俺の責任だから、お願ひだから奢させてくれ。ごめんな、俺の足が長いばかりに」

ヴィデロさんのそつくりさんは冗談めかしてそう言うと、肩をすくめて立ち上がった。

俺の視線が一気に上に向かい、見上げる角度がきつくなる。

いや、さつきの言葉、あながち冗談じやないかも。足なつが！ 俺の腰まで足があるってどうい

うこと。

身長……頭一つくらい違わない？

ADOでは少し身長を盛っているから、その盛りを減らした状態の俺とヴィデロさんの差が、もしかしてこんな感じ……？

彼が立つと、余計にヴィデロさんなんじやと錯覚してしまう。

確実に雄太よりデカい。雄太がこの間百七十八センチって言つていたからそれ以上つてことか。

そう思つた時には声がこぼれていた。

「つかぬことをお訊きしますが……身長、何センチ？」

訊いた後にも凄く後悔した。初対面の人有何訊いてんの俺。

反省していると、ヴィデロさんのそつくりさんがプツと噴き出した。

「そうだな。いつ測つたかは覚えていないが、六フィートは超えていたかな」

「六フィート……？」

普段使わない単位に戸惑つていると、ヴィデロさんのそつくりさんはニヤッと笑つて教えてくれた。

「正しくは、百八十四センチ」

聞くんじやなかつた。二十センチ以上違つた。うん、忘れよう。

ずっと落ち込んだ瞬間、トレイをひよいつと奪われ、手を取られた。

「おいで」

ヴィデロさんのそつくりさんは少しだけ強引に、でもスマートに俺をカウンターまで連れていく。「すみません、俺の不注意で彼の朝食をこんな風にしてしまつたので、同じ物を注文したいんですが」

「はい、少々お待ち下さい」

断る前に頼まれてしまった。じゃあせめて料金は自分が、とカバンを探ろうとしたけれど、片手を握られているので財布を出すことも出来ない。彼がすっと懐からカードを取り出すのをただ見ていた。

一連の行動がスマートすぎて驚きだ。俺もあんな大人になりたい。外身じゃなくて中身だけでも。すぐに出でてきたトレイを受け取ると、彼はそのまま俺の手を引いて自分が座っていた席にそのトレイを置いた。

「あの、お金払います」

「それは受け取れない。さ、座つて。食べよう。俺も途中だから」

「でも」

席はたくさん空いていますとも言えず、仕方なく俺はヴィデロさんのそつくりさんの向かいに座つた。

「ありがとうございます」

お礼を言うと、彼は笑顔で「どういたしまして」と言って、自分のハンバーガーに齧り付いた。なんていうか、リアル美形だ。そして、やっぱり笑顔がヴィデロさんに似ている。

引き寄せられる視線を無理やり引きはがし、俺も買ってもらったものに手を伸ばした。

「それにしても、この時間に制服なんて、もしかして寝坊か?」

「はい。ちょっと夜中まで起きてて。朝起きたらもうこんな時間だったから、諦めて何か食べてから行こうと思って」

「あはは、俺と同じだな。俺も夜中までイイコトをしていて、朝起きたらびっくりの時間だったんだよ」

「イイコト……」

——美形だからね。モテるだろうな。リア充か。

ヴィデロさんそつくりの顔がリア充つてことに、ちょっとだけ胸がちくつとする。でも彼はヴィデロさん本人じゃないからと自分で自分に言い聞かせ、俺はカツプのストローを咥えた。

そんな俺を見て、彼は緑色の瞳を丸くしてから柔らかく緩めた。

「イイコトと言つても、仕事だからな。そんな汚らわしいものを見るような目で見ないでくれ」

「えええ、そんな目で見てませんつて」

「見てた。俺、そんな遊び人じやないからな。誠実だから」

「あはははは」

「そこで笑われるとなかなかくるものがあるな……」

初対面なのにフレンドリーな人だ。仕事がどうの、授業がどうのと、思った以上に話しやすく、初対面だったのにもかかわらず会話が弾む。

トレイの上の物がなくなつても、しばらくヴィデロさんのそつくりさんと話をしていた俺は、ファーストフード店の時計が十時を示す音を鳴らしたことで我に返つた。

「そうだった。流石に全部サボりはだめだつた」

「そうだ、俺も会社に行かないといけないんだつた。予想外の楽しさに時間を忘れてしまつた」

「俺もです。今日はありがとうございました。あの、やっぱりお金……」

「受け取り拒否。俺に奢られる。俺の長い足が原因なんだから」

「確かに長いけど。じゃあえつと……」

返せるものなんて持つてないけど、いつも持ち歩いているお気に入りの餡がある。ポケットの中をこそごと漁つて、俺は餡を取り出した。

「これはどうぞ」

大好きな桜味ののど飴を、ヴィデロさんのそつくりさんに差し出す。

ほのかに塩味で、でも優しい甘さで、すごく好きな飴なんだ。

ヴィデロさんのそつくりさんは、それを受け取つて、ふつと柔らかく微笑んだ。

うん、美形。

「ありがとう。よければ名前を教えてくれないか？ 俺は、ヴィルフレッド・ラウロ。ヴィルって呼んでくれ」

「郷野健吾です」

「おお、強そうない名だな」

俺の名前を聞いて、ヴィルさんが微笑む。

そう、俺の名前って響きだけは強そうなんだよ。『吾^{われ} 健やかに』って思いで父さんが付けたらしくから、全然身長が健やかに育つていない今、名前負けもいいところだけど！ もっと健やかに上に向かつて育ちたい。

それにしても、これから先ヴィルさんの名前を呼ぶ日が来るのかな。

今日は単なる偶然だし。俺が寝坊しなかつたらここに来なかつたし、ヴィルさんも寝坊しなかつたらここにいなかつたかもしれない。そういう偶然。

俺達は二人一緒に席を立ち、店の前で手を振つて別れた。

俺とは反対方向に進んでいくヴィルさんは、桜の飴を持つたまま鼻歌を歌いながら駐車場にむかつていった。

俺は少しだけその背を見送ると、ハツと時間を思い出し、慌てて足を速めた。

休憩時間にそつと席に座ると、雄太に「重役出勤」と言われたので、とりあえず「ひねりがない」と一蹴しておいた。

授業が終わると、俺は急いで家に帰つてADOの世界に飛び込むためのヘッドギアを手に取つた。ヴィデロさんを放置したままログアウトしちやつたから、その後どうなつたのか気になつて仕方なかつたんだ。

お泊り、したんだよね。もう帰つちゃつたかな。俺の工房にいてもやることないだろうし、帰つたかも。そうしたら、門まで行こう。

そんな決意でログインした俺の目の前には――

「……ヴィデロさん……」

美形のドアップが目を瞑つていた。

し、心臓に悪い。格好いい。

腕枕をされていて、その腕が思ったよりも柔らかくてキュンとする。ぎゅっと力を入れると力チカになるそのギャップが最高。

……もしかして、ずっと動けないでいたから、暇で寝ちゃっていたのかな。ヴィデロさんの寝顔、すごくかっこいい。まつげ長い。髪の色と同じ、綺麗な金色のまつげがしっかりと下に向いていて、俺は思わず見とれてしまった。

腰のあたりにかかる腕の重みが心地いい。

それじゃあしばらくヴィデロさんの寝顔を堪能——と思つた瞬間、目が開いた。残念。深緑色の綺麗な瞳が、バチッと開いたまつげの間から俺を見つけ、焦点を合わせた。

「マック……」

少し掠れた声が、下腹部を直撃する。

もう活性剤の効果が切れているから、今誘惑されてもパンツは脱げないんだけれど。その声だけでの気になりそうになつた。

目を瞑り、少し深呼吸して自分を落ち着かせる。改めてヴィデロさんをちらつと見た。

「ごめんヴィデロさん、暇してなかつた……？」

ずっと動けないでいたヴィデロさんにそう謝ると、ヴィデロさんの目がすっと細くなつた。

「こんなにゆつくり寝たのは久し振りだ……」

「え。もしかして、ヴィデロさんも、ずっと寝てた？」

「ああ……でも、マックの寝顔を堪能するはずだつたのに、少し悔しいな」

そう言つて優しい顔をしたヴィデロさんが、俺の唇にちゅ、とキスをくれた。

途端に雰囲気が甘くなる。

昨日の夜も、外が明るくなるまでヴィデロさんを堪能したのに。

俺はおずおずと枕元の『細胞活性剤 小』を手に取り、ヴィデロさんに見せた。

「する？」

そう直球で訊くと、ヴィデロさんが苦笑した。断られなかつたつてことは——いいよね？

むくつと起き上がりつて、瓶を手に取つて、一口だけ飲む。

そしてしつかりと蓋をしてから横を見ると、驚愕したヴィデロさんの顔が目に入つた。

「ヴィデロさん？」

どうしたのと訊こうとして出した自分の声に、俺もびっくりする。

いつもより、妙に高い。

「え？」

「マック、その薬……副作用出でないか……？」

裸のまま起き上がつたヴィデロさんの身体がいつもより大きく見える。

あ、ヴィデロさんパンツ穿かないで寝ていたんだ……つて、そこじゃない。ヴィデロさん、いつもよりかなりでかくない？

ナニがじやなくて、その存在自体が。

——と思う俺の視線の高さが低いと気が付いたのは、ヴィデロさんの言葉があつてのことだつた。

「マック……小さくなつてる」

慌てて立ち上がつて鏡に向かう。

そして自分の姿を見た瞬間、俺は頬れた。

うん。完璧小学生。歳が今回は逆行している。なんでだ!!

その場に蹲つた俺を、下半身に衣類をしつかりと着けたヴィデロさんが掬い上げた。

お姫様抱つこだ。でも鏡を見ると、寝ている子供を布団に運ぶお父さんの絵面になつてゐる。

「なん、なんで……」

なかなかショックから抜けられない俺を、ヴィデロさんが抱つこでテーブルまで運んでくれる。

頭を撫でられ、椅子に下ろされるなんて、俺、まんま子供じやん!

「副作用のことは何か書いてなかつたのか?」

隣で俺の頭を撫でるヴィデロさんにそう言われて、俺はハツと『細胞活性剤 小』の説明を開いてみた。

「……ええと『使いすぎは逆効果』ってなつてる……」

「それだな」

効果欄に追記されている一文を呆然と読むと、ヴィデロさんは納得したように頷いた。

逆効果つて、枯れるとか育たなくなるとか、そういう効能だと思つてたのに、若返るつて……確かに逆の効果になつてゐるけれど!

テーブルに突つ伏すと、とりあえず俺はそう心の丈を叫び声に乗せた。

「せつかくヴィデロさんと久々にゆつくりできるハズだつたのに、こんなのつてない……」

呟きも叫びも、小学生並みの高い声になつてしまい、自ら傷を広げてしまう。

すると、ヴィデロさんが朗らかに笑つた。

「何も身体を重ねることだけが愛を育むわけじやないだろ。今日は小さなマックを堪能させてくれ。こんな機会なかなかないからな」

「でもこんな姿で外に行きたくない……。それにこんな小さくて出来ることつて言つたら……」

そこまで言つて、ふと思いついた。

ピエラのタルトの作り方を教えてもらつたんだつた。

どうせ外に出られないし、かといつてイチャイチャもできないし。

俺はむくつと顔を上げ、ヴィデロさん——の後ろの調理器具を見る。

「今日は料理の腕を上げる日かな」

「それでこそマックだ」

食べてくれる人もいるし、と見上げると、ヴィデロさんがまた俺の頭を撫でた。

テーブルから降りると、ずるつと肩から服の布が落ちる。それから袖口を何回まくつたかわから

ない。ズボンは諦めて、シャツがスカート状態だ。

ヴィデロさんの彼シャツインナーじゃなくて俺自身のインナーなのが、ちゃんとあれでも大きかつたんだな、という事実を示していた……。くそ。

俺が慌てて服を整えると、ヴィデロさんは微笑ましそうな表情になつた。

レシピを開いて、材料を取り出す。

倉庫にあるものと手持ちの物、色々とテーブルに取り出していく。同時並行でレシピを調べた。

ヴィデロさんにはボウルと泡立て器を持つてもらつて、準備完了。

そしておもむろに椅子の上に立ち上がって、ヴィデロさんに視線を合わせた。

椅子に乗つて立つてもなお、ヴィデロさんと視線の位置が合わない。

でももうこうなつたらしようがない。気を取り直してナイフを手に持つた。

「ヴィデロさん、これ、蜂蜜を入れて白くトロットロになるまで焼き混ぜて」

「了解。あ、ナイフは俺が」

「出来るから大丈夫！ 子供じゃないから」

「見た目だけが子供だな。可愛いよ」

何か頼むたび頭を撫でて、刃物を持つた瞬間にヴィデロさんの目が焦る。

ヴィデロさんの目には、俺が完璧に小さな子に映つてゐるらしい。

……この見た目じや仕方ないけれど。

しかも傍から見たら完璧親子クッキング教室。先生が子供。こんなんでいいのか……？

とはいへ、二人で笑いながら料理をするのは、ちょっと楽しかつた。いや、ちょっとじやなくとも楽しかつた。

小さな身体でもなんとかピエラのタルトはしつかりと形になり、あとは籠で焼くだけ。その後、



火の調整をしようとしたらまたもヴィデロさんに「俺が」と止められるハプニングもありつつも、今、俺達の目の前には無事出来上がったピエラのタルトが湯気を伴って美味しそうに鎮座している。

「すごいね。綺麗にできた」

「ああ。すごく美味しそうだ」

「うん……嬉しいなあ。ヴィデロさんとこうやつて一緒に何かを作れるなんて」

微笑むヴィデロさんと一緒に、俺もニコニコと笑顔になる。

あのセッテの農園で味わったあの味は再現できないと思うけれど、一人で作つたつてことがすげく、すごく楽しかった。

記念にちょっと鑑定しよう。

『(ピエラ)の澄果実のタルト』： ピエラの澄果実を使って丁寧に作られたタルト
食べるによって体力が底上げされる(HP最大値+5)
器用さ+10 幸運+3』

「え……」

思わず目を見開いた。

HPの底上げって、どういうこと？ そんなアイテムは今まで見たことない。

装備やレベルが上がるとHPも上がるけれど、こんな風に食べ物でHPの最大値を増やすとか聞く

いたこともなかつた。

鍊金術と違つて料理だから人に出せないなんてことはないよね。ヴィデロさんと一緒に食べられるよね。

うむむ、と唸つて、ハッと気付く。もしかして、これが澄果実の効能なのかも。

とりあえず、ヴィデロさんが強くなる分には大歓迎なので、たくさん食べてもらおう。

タルトを四つに切つて、俺は一切れ、残りをヴィデロさんの前に差し出すと、ヴィデロさんは心得たように頷いた。

「あーんしてほしいんだな。甘えてくれるのが可愛いなマック」

「違うから」

なんかヴィデロさん、わざと俺を子ども扱いして楽しんでないかな。ヴィデロさんが楽しそうだからいいけれど。いや、心情的にはよくないけれど。

早速向き合つて一口食べる。

「うま！ うつまい！」

洋ナシに似た味と香りがすごくいいし、周りに使つたバターは花の香りがして、こつてりした味をあつさり風味にしててくれる。上にかかつたはちみつと合わさつた果汁のナバージュが輝いていて見た目にもすごく美味しそう。

まさに大成功！ つて感じの出来上がりだつた。

ヴィデロさんも、一口食べて目を瞠^{みは}つた。

「美味しいな。食べただけで力が湧いてくるような、そんな味だ。流石マックだな。いい伴侶になる」「へへへ、貰ってくれる?」

「勿論」

冗談で言つたのかも知れないけど、そう返してみると、ヴィデロさんは目を細めて嬉しそうに頷いた。

その笑顔に胸がズキュンと撃ち抜かれる。

とても幸せそうなその顔が、ずっと続いてほしいと切に願う。大好き。

そんな想いを込めて、俺は自分の分のタルトをフォーケに刺して、ヴィデロさんにあーんをした。

結局その日は小さいままの姿で、ヴィデロさんとバイバイした。

ヴィデロさんは、そのままの姿で外に出ると子供を誘拐する奴に捕まるかもしれないから絶対に外に出ないように、と俺に言い聞かせて、後ろ髪をひかれるよう振り返り帰つていった。もしかして、子供の俺で楽しんでいたんじゃなくて、本当に俺が子供になつたような気がしていた、とか……?

使つたのは『細胞活性剤 小』だから、普通の効能と副作用が同じであれば半日くらいで戻るんだけどね。

帰りの心配そうな顔を思い出して、思わず笑つてしまふ。

でもさすがにこの格好では外に出る気になれず、俺は器用さプラス10の効果を堪能するかのよう

に調薬をして、護衛で放出したボーション類をある程度補充してからログアウトした。
ちなみに、小さくてもやつぱりボーション類は効かなかつた。



「雄太、増田、ちょっと話がある」

昼休み、屋上に誰もいないことを確認すると、俺は雄太と増田を前にして、声を潜めた。

二人のうち、雄太は俺の腐れ縁の幼馴染で、増田はそんな雄太と一緒にADOでパーティーを組んでいる友人だ。

ちよつとだけイケメンな大男のようにぐんぐん育ちやがつた雄太と、優男風の大人しい風貌の増田が、なになに、と興味津々で箸を動かす手を止めた。

こんな二人だけれど、ゲーム内ではいい感じではつちやけていて、雄太は見た目と名字そのままをアバターに、増田は美人でグラマラスなキヤラ、海里かいりをアバターにして『高橋と愉快な仲間たち』というパーティー名で活躍している。

二人が俺に注目したので、俺はそつと口を開いた。

「セツテやバい果物を手に入れて、ヤバい食べ物作つちやつた」

「ヤバい食べ物?」

掲示板には絶対に載せちゃだめなやつ。たぶん、あの果物を手に入れられる人は少ないだろうし、

そうなるとトreamさんに迷惑が掛かるだろうから」

俺が声を潜めると、雄太は「またかよ！」と真顔で突っ込みを入れてきた。

「なんで健吾はそんな変な物ばっかり手に入れられるんだよ。エルフの里に向かう地図といい」「なんでだろう。それは俺もわからないんだけど。そんなことより、聞きたくないの？」

「ぜひ教えろ下さい健吾様」

俺が口を尖らせた瞬間、雄太が土下座のまねごとをした。

隣では増田が苦笑している。

雄太のつむじを見て満足した俺は、おもむろに口を開いた。

「——昨日自分の工房で作ったタルト、食べたらHPの最大値が五増えた」

そう教えた瞬間、二人は、俺がナニを言っているのか、全く理解できないように目を見開いた。

「は？」

二人の間抜けな表情に笑いをこらえながら、俺はもう一度同じ言葉を繰り返した。

「昨日自分の工房で作ったタルト、食べたらHPの最大値が五増えた」

「ちよ、待て。おま、なに、それ」

「雄太、なんか拳動不審になつてるよ？」

あまりの噛み具合についつツコむと、今度は増田が困惑した顔で身を乗り出した。

「いや、いやいやいや、郷野？ そんなあつさり言える事例じやないよ？ それつて……まじ？」

まじまじ、と頷くと、二人ともすごい顔付きで距離を詰めてきた。

「くれ」

「それを俺達に教えてくれたつてことは、郷野は俺達にそれをごちそうしてくれるつてことで間違いないよね？」

「そのつもりだけど、俺今トレの工房。こつちまで来れるの？」

ぐいぐい来る二人にそう返すと、二人は即座に「行くに決まつてる」と答えた。

今まだ雄太達はエルフさん達の所にいるらしい。自力で戻つてくるのはかなりつらいはずだけど——と思つていると、一人が作戦会議を始めた。

「ハルポンさんに帰りたいつて泣きついてみるか。理由を聞かれたときは、答えていいのか？」

「元になる素材がほほ手に入らない物だから、あんまり広まっちゃうと俺的にアウトなんだけど……でも、あの人なら、大丈夫かな。中の人達を大事にしない人には絶対に知られたくないけど」

「ああ……」

二人とも、俺の言葉にそつと目を伏せた。

俺とセブンのやり取りを目の前で見ていたから、思うところがあるんだろう。

あの時は雄太に怒つてもらえて嬉しかつたよ。なんていうか、そういうのとか、助けに来てくれるたのとか、その他諸々のお礼がしたかつたんだ。だからこそ、極秘情報の開示だつた。

そこで、あ、と思って俺は顔を上げる。

「あ、ちなみにあの羽根のお守りは直してもらつたから」

につくり笑うと、二人ともほつとしたように表情を緩めた。それからこつそりと、俺が出て行ったからの話をしてくれる。

「あのセブンな、あの後食堂のおばちゃんに叱りつけられててちょっとだけ見ものだつたぜ。その後は一人でどつか行つたからあとは知らんけど」

「そつか。でも俺、もうフレンド解消したんだ……」

「健吾がそこまで静かに激怒するなんてちょっとびっくりしたけど。まあ、ADOをそこら辺のオンラインゲームと同じように考えているやつだつたしな」

雄太は、あつさりと微笑む。

増田も頷きつつ、食後のデザート、と言つて俺にチョコパイを渡してくれた。

「羽根が直つてよかつたね。あの羽根すごく綺麗だつたから、気になつてたんだ。誰かに貰つたんだろ？」

「うん。大事な人に。あの羽根、その人と一緒にクワットロの裏路地のその裏にある『呪術屋』っていう店で買ったんだ。プレイヤーが入れないところの」

チョコパイに囁きながら教えると、雄太がまたもがつくりと頃^{うなだ}垂れた。

「またか……その店、俺も知りてえ……」

「今度雄太達を連れてつていいか、店主さんに聞いてみる」

「つうかそこ、どうやつて行つたんだよ。裏路地にいくクエストとかそこらへんに落ちてんのかよ」

「あ、クエストじやなくて、デート……」

「門番さんかよ！ お前、街の守護者、門番さんを連れて隣町に行つたのかよ！」

「あの時は非番だつたから」

なんか、この話題になる度に雄太の目がらんらんと輝いている気がする。ユイと雄太の交際が発覚するまで、俺達に恋愛系の甘酸っぱい話は皆無つて言つてもいいくらいゲーム関連ばかりだつたから少しだけ面白い。

雄太も彼女が出来てそういう話に興味が出てきたのかな。

そんなことを考えていると、増田が目を丸くして俺を見ていた。

「郷野、門番さんとデートとかする仲だつたんだ。でも門番さんに女性つていたつけ？」

「いやこいつの彼氏は筋肉ガツンと乗つてばつちり雄^おな門番さんだから」

増田の疑問に、雄太がおかしな言い方で俺の恋愛事情を教えてくる。

ばつちり雄つて。雄……つていう響きがすでにエツチな気がするからやめてほしい。

でも、エツチをするときに俺を見下ろしているヴィデロさんは最高に雄つて感じの顔をしているから、あながち間違ひではないけれど。

すごく工口くて、かつこよくて、セクシーで……はつ、いけないいけない、ここは校舎の屋上だつた。

思い出し勃ちするところだつた。ここではパンツが剥がれないわけじゃないから、勃つたら一発でバツる。危ない危ない。

ふー、と大きく息を吐きながら横を見ると、雄太と増田が目を細めて、遠くを見るような目で俺を見ていた。そこには揶揄からかいの雰囲気はなくて、むしろ気遣わしげな感じすらした。

「郷野、それ、不毛な恋じゃない？ 後から郷野が辛くなりそうだよ」

ぽつりと、増田が零した言葉が、胸に突き刺さる。

——知ってる。知つてはいるけれど、はいそうですかって気持ちを切り替えるのはとてもなく

難しいんだよ。だって、こんなにヴィデロさんが好きだから。

へへ、と笑うと、雄太の手が伸びてきて、軽く頭を小突いた。

「そんな顔で笑うなっての。おい増田、不毛かどうかはそれこそ健吾が決めるんだ

「……そっか、そうだね、ごめん」

「いいよ」

頭を下げる増田に首を振りながら、俺は改めて、雄太と友達でよかつたと再確認した。

ほんと雄太はいい奴だよね。ハイポーションばつたくろうとしてごめん。もうしないとは言わな

いけど。



帰宅してログインすると、身体が元に戻っていた。

よかつた。見た目は子供、頭脳は大人になるところだった。

めちゃくちゃ安心した。もうこれでヴィデロさんとサイズ感が親子じゃない。

ちなみに口グインしたときの俺の格好はインナー上半身だけ、袖が肘までまくり上げられていて、あとはテフオのパンツだけだった。溜め息を吐きながら袖を戻す。

その上にローブを羽織って外に出る準備をしながら、ふと雄太が言っていた言葉を思い出した。『そちら辺に生えるもん鑑定したら、全部『謎の素材』つてしか出ない』

——エルフの隠れ里には鍊金術師がいるってことなのかな。それとも『謎の素材』があるだけなのかな。でも十中八九鍊金に関係しているよね。一度行つてみたい。切実に。

クラッシュのお母さんにそのことも訊いてみようかな。今日会う約束をしているし。

エルフの里が鍊金用素材の宝庫つてことは、もしかしたらクラッシュのお母さんが隠れ鍊金術師だつたとか、そういうのないかな。クラッシュの店で鍊金釜を扱っていたんだし。

色々と考えを巡らせながら歩いていると、すぐに冒険者ギルドに着いた。中に入ると、様々な装備をした人達がたむろしている。

中には強そうな装備の人とかもいて、一つのテーブルを囲んでいる。

パーテイーでクエストの相談とかだろうか。楽しそうだ。

ギルド内の雰囲気を楽しみながら、受付の女性に「統括と約束していた者ですけど」と声を掛ける。

——受付内部がざわつとなつた。

そして、すぐさま受付カウンターの奥の階段に案内されてしまった。